大学院医療保健学研究科の授業評価結果に対する考察（平成 26 年度）

大学院医療保健学研究科長　木村　哲

１．授業評価アンケートに対する感想

○ 大学院授業評価集計結果の年度別比較では、平成 26 年度は各設問において多少評価が低い印象であるが、「そう思う」と「ややそう思う」までを含めると総合的な満足度において 91.6%となっており、昨年度の 90.8%に比較しても特に否定的な意見は増えていない。

○ 対前年度で評価が 3 ポイント以上下がった質問項目は、「この授業は将来役立つと思うか」と「授業はシラバスに沿っておこなわれたと思うか」であった。大学院の講義はかなり幅広い領域を対象として行われているものが多く、院生に直接的に将来役立つかどうかの見極めが困難な項目があることも否めない。また、シラバスの作成において、授業内容と照らし合わせて院生が予習しやすい項目立てをすることも必要であると思われた。

○ 「授業に意欲的に取り組めた」が 93.5%(前年度 94.9%)、「授業内容が良く理解できた」が 85.6%(前年度 85.4%)、「授業は期待通りであった」については 85.6%(前年度 86.7%)などとなっており、対前年度と同様の評価結果であったと考えられる。今後とも、院生が授業に積極的に取り組めるように配慮するとともに、期待した授業内容となるような工夫がさらに必要であるといえる。

○ 多忙な中で事前学習を実施してくる院生においても、それでも内容が十分とはいえないことも多く、充実したディスカッションに至らないことも往々にしてあり、授業においてフィードバックや追加説明を行う必要性は大きいと感じている。

○ 院生はテーマを設定したディスカッションを通して、熟考していく授業・学び方がよいと考えていること、また、授業中の発言が少ない割には、受け身ではなく、能動的に参加していく授業を望んでいることが分かった。

○ 研究指導を含めて、全体としては教員の姿勢について高い評価をいただいた。今後も院生が授業を理解し、意欲が持てるように、更に分かる授業を目指していきたい。

○ 評価から、全体的には院生自身が関心を持ち、積極的に学ぶことができたのではないかと考える。

○ 講義内で、論文のクリティーク(批評)を行ったことに対する評価が高いと感じた。またディスカッションの時間を多く設けたことに対する評価も高いと感じた。

２．授業において工夫した点

○ アップデートした授業資料を用いること、および先輩院生の研究を用いてディスカッションを行い身近な課題としてとらえることができるようにした。

○ アップデートした授業資料を用い、新しい手法としてケースメソッドを取り入れたこと、単元テーマに関する先進の研究者を招いた授業を行い、教科書を読めばわかるような授業ではないような工夫をした。

○ 授業内で講読する文献量を増やした結果、難しいと感じる院生もいたかと思われるが、研究デザインを考えたり、クリティークを行う経験を

積み重ねることが大切なのではないかと思っている。授業において特に工夫した点は次のとおりである。

1) 参画型の授業を多く取り入れたこと。
2) 自分の経験を語りながら議論していく手法を取り入れたこと。
3) 多くの臨床場面から絞っていく熟考型授業にしたこと。
4) 現在の課題となっていることを情報提供したこと。

○ 院生の専門領域が多岐なので、それぞれが授業内容に満足できるように考慮している。従って、科目名の「感染制御学特論」の「看護学」に特化することが問題だと考えており、院生の意見を傾聴して授業内容を組み立てている。感染制御学が幅広い専門職に理解されることは重要であり、お互いが他職種と強調できることを目指している。

○ 受講者に役立つ内容とする、理解しやすい説明をする、重要ポイントにつき理解度をチェックすることなどを心がけた。

○ 医療栄養学領域においては、消化器の各臓器の基本的な解剖と機能を消化・吸収と関連づけて学ぶようにテーマを絞った。また、動画・スライドなどの画像で消化器手術や内視鏡治療を分かりやすく紹介するようにした。

○ 院生は教育力・実践能力・研究力の向上によるキャリアアップを図ることを目的として大学院に来ているので、課題学習を通して目標の明確化、伝える力をつけるために学習教材の選択や発表の方法の検討など院生と共に探求していきたい。

○ 助産学領域においては、災害看護など、院生と共に授業に参加することにより、自己肯定感や教育的指導などに繋がっているようなので、継続していきたいと考えている。

○ 関連する英論文の要約・まとめなどを取り入れた。しかし、社会人の院生にとっては、時間もとれず難しかったようであった。

○ 最新の情報を得ながらの学習は、現場や今後に活かせると考え、適時授業内容を変更した。しかし、逆にシラバス通りに進まなかったことは反省している。

○ 看護マネジメント領域においては、職場におけるメンタルヘルスマネジメントをテーマとして、講義、教科書の輪読及び論文のクリティークを行い、 職域メンタルヘルスマネジメントについて多角的に考察できるよう工夫した。また、他の講義で学んだ統計解析方法や論文クリティークを本講義内でも活用し、より理解が深められるよう工夫した。

３．授業評価結果を今後の授業にどの様に生かしていくか

○ 院生の理解状況やニーズを把握しながら授業を進めていくこととしたい。

○ 他の人にも勧めたいか、進め方が適切だったか等についてどちらともいえないという評価があることから判断して、オリエンテーションの不十分さや、進め方・内容について院生の意見が反映されていないことが推測されるので、授業前中に適宜、フィードバックを得る機会を設けたい。

○ 評価項目に沿って、評価しながら授業展開を行っていきたい。院生の理解度などを途中で確認しながら、進めるようにしたい。

○ ディスカッションを希望している院生が多いので、テーマを挙げ対話型授業にするように心がけたい。

○ 授業の中で、院生が論理的に思考し発言できるようにサポートする必要がある。

○ 病院や施設などで感染制御業務を行う上で、必要になる微生物検査や

感染症検査を中心に、更なる内容の充実と理解しやすい授業を心がけたい。

- ○ 理解が十分でなかったような意見もあるので、内容の理解度を確認しながら進めるようにしたい。
- ○ クリニカル・クウェスチョンからリサーチクウェスチョンへの探求を試み、自らの研究課題を明らかにすること、また、文献検討、まとめを討議するなどの授業の工夫を実践することを通して分かりやすい授業や研究指導を検討していきたい。
- ○ 関連する英語論文を読み、理解することは必要であるが、abstract のみにする、原著ではなく report のような報告物にするなど、配慮する必要がある。
- ○ 統計解析方法や論文クリティークをより活用し、他の講義とのつながり及び本科目の内容理解がより深まるようにしたい。

４．その他の記述

- ○ 講義の資料をカラーで見やすく作成していることもよい評価に繋がっていると思う。
- ○ 受講者(院生)との連携を密にし、業務上の質問などにも応じていきたい。
- ○ 必修科目と選択科目とでは、院生の動機も異なりそれに応じて教員の対応も異なること、また各領域によって回答者の母数も異なることから、平均値の出し方については今後検討したい。
- ○ 教員は、院生が自ら考え行動できる能力を培える教育を探求し、実行していきたいと思っている。また、大学院生として、多くの本や文献を読み、積極的に授業や演習に取り組み、自信を持って頑張って欲しい。